

フジヤマのトビウオの陰に トンカツ・ビフテキの力が

スポーツ界には、その選手の特技・性格等を表す異名が数々残されている。

いわく「暁の超特急」(吉岡隆徳)陸上短距離)、「アトミック・ボーイ」(田中茂樹)マラソン)、「打撃の神様」(川上哲治)野球)等々である。

しかし何といつても、強烈な印象を残したのは、古橋広之進の「フジヤマのトビウオ」であろう。

昭和二十四年(一九四九)八月十六日のことだった。

日本大学水泳部の古橋は、戦後初めて参加を許された国際大会、ロサンゼルス of 全米水上選手権で、千五百メートル自由形を十八分十九秒で泳ぎ、世界新記録で優勝した。

二年前に四百メートル自由形で世界記録を出したあと、世界新記録を連発していたとはいえ、「敗戦国の若者が…」といふかっていた世界各国の記者たちも、その古橋の泳ぎを見て納得した。

さらに十八日には四百メートルで、十九日にも八百メートルで世界新記録をたてつづけに更新した。

この大会で、彼は「THE FLYING FISH OF FUJIYAMA」の異名を奉られた。

この知らせは、敗戦に打ちひしがれた暗い世相をふきはらった。

当時の古橋らはサツマイモをかじりながら、練習に打ち込んでいた。

無我夢中で泳いでいれば、つらいことも忘れられるし、タイムもどんどんよくなって、練習は楽しくて仕方なかったと語っている。

粗末な物を食べていても、夢があったとも言っている。

その古橋の当時の口ぐせにこんな言葉があった。

「トンカツとビフテキを食わせてくれれば、へいちゃらで新記録を出してみせる」というのである。

サツマイモ腹で三十三回も世界新記録を出したのだから、トンカツとビフテキを腹いっぱい食べさせることができたら、どれほど素晴らしい記録が生まれたことやら。

